高知県立
文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
Vol. 72

▲雪景色の宮沢賢治原稿収蔵庫（宮沢賢治記念館／岩手県花巻市）

リレー随筆

# 〈怒りの人〉宮沢賢治

鈴木 健司

いわゆる名言集なるものが宮沢賢治の場合も世に出ている。名言の中の一つに「かなしみはちからに、／欲りはいつくしみに／いかりは智慧にみちびかるべし」という言葉がある。この言葉は、大正九年、保阪嘉内あて書簡に見いだせるものだが、宮沢賢治の心の深さを表して余りあることは、私なりに十分に納得、理解しているつもりである。

ただ、私はこの名言をもって、宮沢賢治を紹介することに躊躇を覚えるものでもある。私としては、同書簡に記されている「いかりがかっと燃えて身体は酒精に入った様な気がします。机へ座って誰かの物を言ふのを思ひ出しながら急に身体全体で机をなぐりつけそうになります」の方こそが、宮沢賢治らしい名言と考えているのである。

私は悪趣味からこんな物言いをしているのではない。宮沢賢治が〈怨しの人〉であるとして世に広められている以上、〈怒りの人〉であったことをも世に広めなければ、文学者・宮沢賢治は決して我々の前に姿を現してこないからである。私は聖人になるために宮沢賢治を研究しているわけではないし、菩薩になるためでもない。

「いかりは赤く見えます。あまり強い時はいかりの光が滋くなって却て水の様に感ぜられます。遂には真青に見えます」。私は怒りに色彩を感ずることがないので、よくわからないところもあるが、この怒りは、私の経験している怒りをはるかに超えた次元のように感じられる。「ほとんど狂人にもなりさうな発作」とも記されているほどだ。

おそらく、私にとって宮沢賢治の怒りが大切な意味をもつのは、このような宮沢賢治の激しい怒りに接することを通じ、ようやく、自分の感ずる怒りが愚にもつかない程度のものであることと納得するからだろう。宮沢賢治は怒りにおいても常識を突き抜けている。

そもそも、宮沢賢治は〈怒りの人〉として、おのれの文学をスタートさせたのではなかったのか。「いかりのにがさまた青さ／四月の気層のひかりの底を／唾し　はぎしりゆきする／おれはひとりの修羅なのだ」（「春と修羅」、詩集『春と修羅』）。

〈怒りの人〉は、宮沢賢治作品を読む上でのキーワードといいたい。

（文教大学教授）

展覧会紹介 Exhibition

# 宮沢賢治 ことばの宇宙展

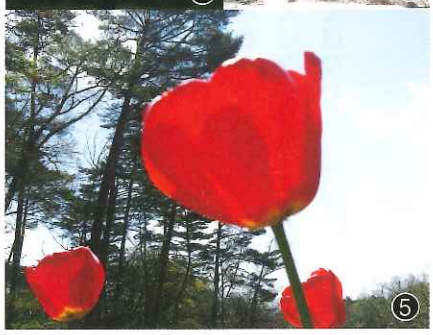
平成28年
2月11日(木・祝)
▽
4月17日(日)
観覧料500円

①

②

④

③



⑤

写真キャプション／
①展覧会チラシ
②賢治が何度も登山し、詩にも詠んだ岩手山焼走溶岩流
③技師時代の心境を詠んだ東北砕石工場跡賢治歌碑
④花巻市北上川にあるイギリス海岸の目印
⑤光の酒を注がれたチューリップの杯（「チュウリップの幻術」）

「すべてわたくしと明滅しみんなが同時に感ずるもの（『春と修羅』序より）」

「孤高の詩人」として知られる宮沢賢治（1896－1933）は、平成28年、生誕120年を迎えます。宮沢賢治の故郷、岩手県花巻市は賢治の心象中のドリームランド「イーハトーヴ」として、動物や自然が生き生きと描かれた作品の舞台となっています。今では多くの教科書に彼の作品が掲載され、数限りない書籍、映像が出版されていますが、生前、出版したのは童話集『注文の多い料理店』と詩集『春と修羅』のたった2冊でした。しかもその大部分が売れ残ったと言われています。今でこそ「雨ニモマケズ」は代表作であるかのように認識されていますが、この詩は雑誌や新聞に発表したことはなく、使っていた手帳に記されていた詩です。この夭折の詩人は37年の短い生涯の多くを岩手の地で過ごしました。岩手の自然との交感の中で生まれた詩や童話は、宮沢賢治の「ことばの宇宙」からすくいだされ、他に類を見ない清らかな作品となり、没後80余年たった今も、多くの人々の心を引きつけてやみません。宮沢賢治のすきとおった物語のことばを、美しい東北の写真と共にご紹介します。

## はじめに

「わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。（『注文の多い料理店』序より）」

賢治が生前唯一出版した童話集『注文の多い料理店』の広告文には「十二巻のセリーズの中の第一冊で先づその古風な童話としての形式と地方色とを以て類集したもの」とあることから、全十二巻で構想していたものと考えられています。その序には賢治が童話に込めた願いが書かれています。今回の展覧会では賢治の作品を生きもの、大地、大気、宇宙のそれぞれのカテゴリに分け、賢治の描いた世界を楽しんでいただきたいと考えています。さあ、賢治のことばの宇宙へ旅立ちましょう。

## 第一章　生きものたちへのまなざし

「…わたくしはこのはなしをすきとおった秋の風から聞いたのです。（「鹿踊りのはじまり」より）」

賢治の作品には自然の中の動植物を描いた作品が多くあります。どの作品も自然と人間のありかたや、生き方について問いかけています。賢治の描いた動物の自然史資料と岩手を拠点として活躍されている写真家の瀬川強さんの写真を中心に、賢治の描いた場面に思いを馳せてみましょう。

**（紹介する作品…「やまなし」「雪渡り」「どんぐりと山猫」「注文の多い料理店」「セロ弾きのゴーシュ」「よだかの星」「なめとこ山のくま」など）**

## 第二章　大地との語らい

「虹の脚もとにルビーの絵の具皿があるそうです。（「十力の金剛石」より）」

幼い時分に鉱物採集に夢中になり「石ッコ賢さん」と呼ばれた賢治は、盛岡高等農林学校で地質学を学び、農学校の教師となりました。地質学の知識をもって、作品中に多くの岩石、鉱物を登場させています。岩石、鉱物を扱った作品を天産資料と『イーハトヴ自然館』著者の岡崎務さんの写真を中心にあわせてご紹介します。賢治が盛岡高等農林学校時代に土壌調査で採取したと言われる岩石資料（岩手大学農学部蔵）の展示もしています。

（紹介する作品…「グスコーブドリの伝記」「小岩井農場」「イギリス海岸」「楢ノ木大学士の野宿」など）

## 第三章　風と水をめぐる旅

「風とゆききし　雲からエネルギーをとれ（「農民芸術概論」より）」

大地と宇宙の間にある大気と、その間を循環する風と水。地球を包む大気には人知を越えた不思議がたくさんありました。宇宙と地上の間をめぐる雲や風をテーマにした作品をご紹介します。

（紹介する作品…「風の又三郎」「蛙のゴム靴」「十力の金剛石」「永訣の朝」「水仙月の四日」など）

## 第四章　宇宙との交感

「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう（「農民芸術概論」より）」

賢治には、星や銀河を舞台にした作品があります。最愛の妹を亡くした賢治にとって、宇宙は星や天体があるだけの空間ではなく、精神が旅をする神聖な世界であったようです。天文写真家の藤井旭氏の写真を中心に、物語に描かれた天体の写真と併せてご紹介します。

（紹介する作品…「銀河鉄道の夜」「双子の星」「農民芸術概論」など）

## 賢治さんと土佐人

賢治と関わりのある三人の土佐人をご紹介します。文学館顕彰作家で、「南海の宮沢賢治」と呼ばれた岡本弥太。生前所蔵していた『春と修羅』などをご紹介します。盛岡高等農林学校の後輩で、『注文の多い料理店』出版に関わった近森善一。そして花巻出身で賢治と同級生であり、高知大学学長を務めた英文学者の阿部孝についてご紹介します。

当展覧会では、賢治を知る、感じる関連イベントもたくさんご用意しております。この春は、ぜひ高知県立文学館で賢治のことばの宇宙へ、飛び込みましょう！

（学芸課／谷岡真衣）

⑥賢治がしばしばトルコ石脈に例えたような空
⑦雲のような房状玉髄。賢治は光をうけた雲を玉髄に例えた
⑧作品「マグノリアの木」で諒安が霧の谷あいで出会ったマグノリア（コブシ科）の花
⑨作品「どんぐりと山猫」で金田一郎が訪れたようなブナ林

## ◆関連企画のご案内◆

### ■記念講演会「祖父から聞いた兄・宮沢賢治」

賢治さんの弟・宮澤清六氏の孫で林風舎代表の宮澤和樹さんによる講演会。

・日　時：2月11日（木・祝）午後2時～
・場　所：高知県立文学館1Fホール　※開場は午後1時～
・講　師：宮澤和樹氏　　・参加費：参加には当日観覧券が必要です。
・定　員：100名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）

### ■プラネタリウム番組「銀河鉄道の夜」上映デー

全国で100万人を動員したプラネタリウム番組スタジオKAGAYAの「銀河鉄道の夜」高知初上映！

・日　時：3月5日（土）、6日（日）午前10時、11時、午後1時、2時、3時、4時
※上映時間約40分。各日とも平面スクリーンでの繰り返し上映となります。
・場　所：高知県立文学館1Fホール
・定　員：各回とも50名程度（申し込み不要、直接会場にお越しください。）
・参加費：参加には当日観覧券が必要です。

### ■講演会「オパールから見える宮沢賢治」

宮沢賢治研究家の鈴木健司先生による賢治作品「貝の火」解釈講座です。

・日　時：3月13日（日）午後2時～
・場　所：高知県立文学館1Fホール　※開場は午後1時～
・講　師：鈴木健司氏（文教大学教授、元・高知大学教授）
・定　員：100名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）
・参加費：参加には当日観覧券が必要です。

### ■童話ステンドグラス風シール作り

賢治さんの童話をモチーフにしたステンドグラス風シールを作っちゃおう！

・日　時：3月20日（日）、21日（月・祝）
各日とも午後1時～
・場　所：高知県立文学館1Fホール
・定　員：各日とも50名（要事前申し込み）
・参加費：参加には当日観覧券と材料費100円が必要です。

### ■銀河ペンダント作り

銀河と天然石を閉じ込めたアクセサリーを作ろう！

・日　時：2月28日（日）、3月27日（日）、4月10日（日）各日とも午後1時～
・場　所：高知県立文学館1Fホール
・定　員：各日とも30名程度（事前申し込み不要）
・参加費：参加には当日観覧券と材料費300円が必要です。※UVレジンを使用します。

### ■展示解説

展覧会担当者による展示解説です。

**会期中**
**毎週土曜日**
**午後1時半～**
**（約20分程度）**
※2月20日、3月12日は休み

参加費：要当日観覧券
申　込：不要。
直接会場にお越しください。

**他にも発掘イベントや朗読の会など、多彩な関連企画を用意してお待ちしています。**

# 常設展虫めがね

第6回

シリーズで、変わる常設展示をご紹介！

高知県立文学館では、いつ来ても新しい発見、新しい体験をしていただけるよう、展示入替を行っています。今年度は「自由民権」コーナー・宮崎夢柳、「反骨の大衆文学」コーナー・森下雨村、「現代の作家」コーナー・清岡卓行、「近現代の詩歌」コーナー・北見志保子を新たにご紹介しています。

## 展示作家紹介　清岡卓行

清岡卓行は1922(大正11)年、中国大連生まれの詩人、小説家、エッセイスト。両親はともに高知県出身で、清岡は紀行文「ふるさと土佐」において、自身が生まれ育った大連を〈風土のふるさと〉、父祖の地・高知県を〈血縁のふるさと〉と呼んでいます。

大連での中学時代、文学書やクラシック音楽に熱中。たまたま家にあった岩波文庫や第一書房版『佐藤春夫詩集』をきっかけに文学に関心を持つようになり、ボードレールやランボーの詩に強く憧れたといいます。

1941(昭和16)年、東京の第一高等学校に入学。入学後まもなく、同校の文芸誌「護国会雑誌」に「名を寄す」(後年、加筆の上「ある名前に」と改題し処女詩集『氷った焔』に収録)を投稿。これが掲載されて漢文教師・阿藤伯海に認められ、詩作に喜びを覚えます。

1944(昭和19)年、東京大学仏文科に入学するも、戦火の激しくなった翌年に休学。死ぬ前にもう一度見ようと大連へ渡り、そこで終戦を迎えます。戦後も数年間大連に留まり、同地で結婚。1970(昭和45)年に芥川賞を受賞した代表作「アカシヤの大連」は、この終戦前後の青春期の体験に基づいています。

清岡は猛打賞の発案者としても知られ、引き揚げ後は、プロ野球の試合日程編成という特殊な職務や大学の教員等を務めながら創作活動を続け、1980(昭和55)年より文筆に専念。2006(平成18)年に83歳で死去するまで、詩、小説、評論、エッセイと幅広く執筆し、独自の鋭い感性と深い思索を示しました。

今回の展示では、清岡の多様な作品の中から、大連や高知に関するものや、詩稿「さつき晴れに」他の自筆資料、詩人としての出発点となった「護国会雑誌」『氷った焔』等をご紹介しています。今年は没後10年となる記念の年。二つの故郷、創作と生活、詩と散文、これらを破綻なく調和させ、優れた作品を発表し続けた清岡卓行の人と文学について、少しでもお伝えできればと思っています。

(学芸課／小松路代)

▲展示風景

## 館長室から

### 年のはじめに

元吉　喜志男

近年の様々な統計指標などを見ていると、時代の潮流の中で本や文学作品を取り巻く環境が変化していることを感じます。

例えば、出版関係の統計数値で書籍・雑誌の売り上げでは、当館が開館した1990年代中後期頃のピーク時と現在では実に30～40％台程の大幅な減少が見られます。もっとも、この数値には「出版社による直販」や「アマゾン直接取引」といった取り次ぎを経ない販売金額とか電子出版(電子書籍)などは入っていないので不鮮明な点も多くあります。書店数の減少も気になります。ただこれも全国的には総床面積は減っていないようなので、地域大手や全国大手チェーンの規模拡大などの動きとも絡めて考えることも必要でしょう。出版産業のビジネス形態が大きく変化する中で、統計上に出てこない背景などにも留意して市場全体の変化に想像力を働かして考えることの重要性を感じたりしています。

こんな中で、2015年の出版界は、芥川賞を受賞し年間ベストセラー1位となった、お笑いコンビ・ピースの又吉直樹著『火花』の〝フィーバー〟に注目が集まりました。因みに、2位はジェニファー・L・スコット著『フランス人は10着しか服を持たない』、3位は下重暁子著『家族という病』と続き、ここ数年人気のあった健康本、ノウハウ本等が減ったことも昨年の特色の一つのようにも思えます。

年間ベスト10に小説や古典、日本や世界の文学全集が名を連ねていた頃のイメージをいまだにどこかに持っている世代の者として、文学に関心を持っていただくことを業としている「文学館」の将来を見据えた運営のあり方なども考えたりしている〝年のはじめ〟です。

## 土佐文学さんぽ 71

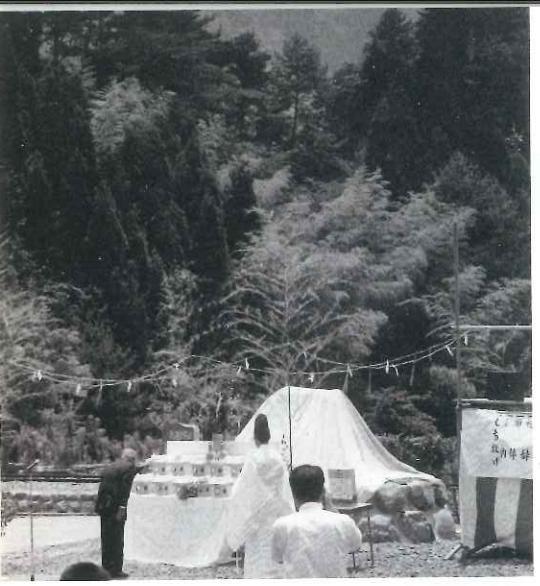
# 魚梁瀬（やなせ）の中江兆民碑 ―来訪一〇〇年を記念―

猪野 睦

魚梁瀬へはなんどか行った。むろんダムができ、そばに丸山台ができ営林署が廃止になり、森林鉄道もなくなってからだった。そこからさらに奥地の天然杉林を見にゆき、その藩制時代からの自然の壮観に打たれもした。

かつて伐られた国有林材は田野、奈半利の貯木場へ狭軌の森林鉄道で運びだされていた。そのカーブの多い鉄道のトンネルと鉄橋は面影をのこしていたが、軌道はトラック道に変っていた。一般住民もかつては、この長い〝ガソ〟と呼んでいた木材運搬車につないだ小さな箱車輌に乗せてもらっていた。

田野から馬路村へ、そこから魚梁瀬へ峡谷道をさかのぼり、ダムにかかる長い橋を渡ると丸山台地だった。沈んだダム湖から移転した丸山台には大きな公園ができ、そこには往年の森林鉄道機関車〝ガソ〟が展示されていてトロッコがつながれ、訪れる人を乗せて軌道をひとめぐりしてくれる遊園地になっていた。



◀中江兆民曽遊記念碑除幕式の様子（1995年12月発行／「兆民研究」7号より）

この遊園地に中江兆民碑が建ったのは1995年7月28日だった。〝東洋のルーソー〟といわれた中江兆民が、この魚梁瀬を訪ねた1882年、明治21年の日を記念顕彰しようと高知市立自由民権記念館兆民の会、地元の協力で建てたものだった。100年をこえて中江兆民を魚梁瀬によみ返らせた快挙だった。

除幕式には大阪から小田実に記念講演にきてもらい、高知市からも大型バスでかけつけ、そのあとの村をあげての祝賀会もにぎわった。

中江兆民〝東洋のルーソー〟は明治初期フランスから帰国すると仏学塾を開き、多くの門下生を育てた。その門下生の一人に魚梁瀬出身の山崎保太郎がいた。

保安条例で1887年、明治20年に東京を追われた兆民は大阪で「東雲新聞」の主筆になっていた。大阪で保太郎の父に魚梁瀬へアメゴを喰べにきませんかと誘われる。兆民は徳島県の海部から二日半かけて迎えにきた保太郎と県境山越えで〝土佐の山国中にても最も山奥〟の魚梁瀬にたどりつく。二日間の滞在で兆民は田野へ下り高知へむかうが、高知市は民権運動が湧いていた。

門下生保太郎はそのあと馬路村初代村長となった。忘れられてきていた中江兆民の足跡が100年をこえて碑によみがえった。「三酔人経綸問答」などの文学者でもあった兆民のそこから呼びかけてくるような碑は、いかにも〝自由は土佐の山間より〟というにふさわしい。あらためて訪ねたい。

（詩人）

## 資料受贈報告

# ―寄贈資料から― 宮部直巳書簡（大正15年～昭和8年）

今回ご寄贈いただいたこの資料は、地球物理学者・随筆家の寺田寅彦（1878―1935）が、弟子であり、地震研究所の助教授、のち名古屋帝国大学の教授も務めた地球物理学者・宮部直巳（1901―1973）に宛てた書簡です。

寅彦は、大正15年に東京帝国大学理学部教授に在籍したまま、東京帝国大学地震研究所所員を兼任していました。一方の宮部は、砂層の崩壊の研究等で寅彦と共著の研究もあります。

この資料は、地震研究所の方が大切に保存していたものを、寅彦の資料なので当館へと寄贈して下さったものです。寄贈された資料には、寅彦のはがき・書簡13通の他、寅彦論文の抜き刷りなどもあります。書簡は寅彦が地震研に入ってすぐの大正15年から昭和8年までのものです。書簡の中には絵はがきや、理研の写真のはがき、また切手のない、おそらくは研究所内でやり取りしたと思われる手紙もあります。また抜き刷りなども、とても状態がいいものです。

書簡を読んでみると、砂層研究や地震についてなど研究についての内容がほとんどですが、それ以外にも宮部の体をいたわる言葉、遊びに来なさいという誘い、さらには旅先で来客が多い様子を「社交の練習をしようとは思いませんでした」と冗談めかして書いたものや、出さなければならない手紙を机の上に忘れたので代わりに投函してくれないかというお願いなど、寅彦の弟子に対する気遣いや気さくな一面もうかがえて、大変興味深い資料です。

（学芸課／永橋禎子）

受贈報告（平成27年11月～平成28年1月）敬称略

▼嶋岡 晨・「詩集 騒霊 Poltergeist 嶋岡 晨著 洪水企画刊」他 ▼徳間書店・「番神の梅 藤原緋沙子著 徳間書店刊」 ▼祥伝社・「秋しぐれ 風の市兵衛16 辻堂 魁著 祥伝社刊」 ▼榊原忠彦・「面影に立つ―師友たちよりの書簡拾遺集― 榊原忠彦著 共和印刷刊」 ▼依光ゆかり・「歌集 運命の犬 依光ゆかり著 砂子屋書房刊」 ▼山本 衛・「詩集 黒潮の民 山本 衛著 コールサック社刊」 ▼山本清水・「詩集 風の中 山本清水著 清樹社刊」 ▼冨髙充子・「太陽に酔う 清岡卓行著 講談社刊」他 ▼普光江秀子・「光の帝国 普光江泰興著 吟遊社刊」他 ▼横田晴光・「植物図鑑 有川 浩著 角川書店刊」他 ▼嶋田清子・「三姉妹歌集 しいの実 野村 静・嶋田清子・松尾 澄著刊」 ▼山本靖子・「野中兼山 小川俊夫著 高知新聞社刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

学芸員メモ

# 中脇初枝さん原作の映画「きみはいい子」高知で上映！

高知県中村市（現・四万十市）で少女時代を過ごした作家・中脇初枝さんの作品を映画化した「きみはいい子」（アークエンターテインメント）を、高知県で上映しようという声が高まっています。

原作の『きみはいい子』（ポプラ社）は、児童虐待をテーマにした作品で、虐待される側だけでなく、する側の心理も丁寧に描き、大きな反響を呼びました。2013年には坪田譲治文学賞を受賞しています。

先日、映画の試写会に招かれ、中脇さんのお話と映画を拝見しました。デリケートなテーマだけに、中脇さんは、映画化には慎重だったそうです。しかし呉美保（おみぼ）監督は、中脇さんの思いを汲んで、丁寧に映像化しています。悲劇を必要以上に強調せず、安易なハッピーエンドでもなく、映画を見終わったあともじっくりと考えさせられる、余韻のある作品でした。また、高良健吾さんや尾野真千子さんなどの演技だけでなく、子どもたちの演技が大変印象的でした。子役に加え、映画のロケ地である北海道の子どもたちが生徒役として出演しているのですが、演技と感じさせない表情で、引き込まれました。

高知市では、2016年2月23～24日、28日に上映され、その後も各地域で上映が予定されています。

私たちの住む高知県でも、児童の虐待死亡事件が発生しています。身近なところで苦しんでいる人がいる現実に対して、私たちは決して無力ではないと信じられる映画です。原作とあわせて、ぜひご覧ください。

（学芸課／永橋禎子）

## ご一緒にいかがですか？

高知県立文学館のミュージアムショップでは、平成26年9月～11月に当館で開催した【中脇初枝展】の展覧会図録（税込500円）を好評販売中です。

トピックス

# 巡回展 東京写真月間2015 in 高知展＆天然写真家・前田博史写真展 が 1月30日(日)～2月7日(日)に開催されました！

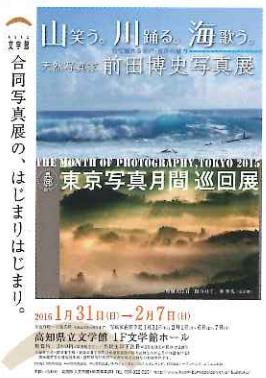
この度、当館では初めてとなる合同写真展が文学館1階ホールにて行われました。

ホールを半分ずつに区切り、南側では「東京写真月間2015巡回展」を開催。（公財）日本写真協会と東京都写真美術館が中心となり、「写真の日（6月1日）」を記念して全国からの公募で審査された入選作品を展示しました。今年は高知から7名入選しています。

ホール北側では「山笑う。川踊る。海歌う。―目で触れる室戸・東洋の魅力 天然写真家前田博史写真展」を同時開催。高知市在住で自然写真としてご活躍の前田氏が、世界ジオパークに認定された室戸岬周辺をテーマに撮影した写真からは、海岸に打ち寄せる波が迫力満点に切り取られています。

▲東京写真月間2015巡回展の様子／撮影：猪野

▲前田博史写真展の様子／画像提供：前田博史氏



文学館 合同写真展の、はじまりはじまり。

初日は開館前からお待ちになっているお客さまがいらっしゃるほどの盛況ぶりで、会期中も絶え間なくお客さまがいらっしゃる状態でした。8日間の短い会期でしたが、多くの写真ファンの皆さんのご期待に沿えたと感じています。

最後になりますが、実行委員会の皆さまおよび前田博史氏に感謝申し上げます。

（副館長／猪野 満）

# 展覧会レポート

# 親愛なる寺田先生

## ～師・寺田寅彦と中谷宇吉郎展～

2015年は寅彦没後80年の年であり、2016年は中谷宇吉郎が人工雪を世界で初めて製作した年から80年であるということで、高知県立文学館では、「親愛なる寺田先生～師・寺田寅彦と中谷宇吉郎展～」(2015年12月5日～2016年1月31日)として、寅彦と宇吉郎の親交に焦点を当てた展覧会を開催しました。

展示では、二人の愛用の品や研究の手書き論文、二人の愛した芸術、現在も残る名言などをご紹介しました。また、intermezzo（間奏曲）として、二人の名のついた惑星の紹介、現代アート作家のmamoru氏の作品や、雪のデザイン賞の過去受賞作品、宇吉郎の弟の治宇二郎が芥川に激賞された作品の紹介なども行いました。

久しぶりの寺田寅彦展であり、初めての科学的側面に焦点を当てた展覧会であったので、絵画や書簡などの新資料や、これまでなかなか展示できなかった科学資料など、皆様に初めてお披露目した資料が多くありました。さらに、保存の観点から、めったに実物を展示できない漱石書簡なども展示することができましたので、当館に所蔵している貴重な資料を皆様に見て頂ける、とても良い機会だったと思います。

関連企画では、展覧会の監修もして下さった前中谷宇吉郎雪の科学館館長の神田健三氏に来て頂き、記念講演会や実験イベントを行いました。神田氏のお話は大変興味深く、みな熱心に聞き入っていました。そしてイベントが終わった後に、会場のあちらこちらで交流が始まっていたのが大変印象的でした。実験では寺田寅彦記念館友の会の皆さんがお手伝いをして下さり、滞りなく進められたのも本当にありがたかったです。

多くの皆様に支えられた「親愛なる寺田先生展」、寅彦を愛する皆様のお声を受け、今後もこの偉大な人物の業績を一人でも多くの方に知って頂くために、頑張りたいと思います。

（学芸課／永橋禎子）

▲実験イベントでお話される神田氏(左)

▲展示の様子

▲展示解説の様子

## 寅彦ファン必見！

## 高知県立文学館限定！
## 素敵な寅彦オリジナルグッズが好評販売中です

好評につき完売していた寅彦コーヒーカップ（税込1,400円）も再販売しています。
ポストカード（各種税込50円）、一筆箋（税込300円）のほか、ドリップ式の美味しい寅彦コーヒー（税込100円）などもございますのでぜひご利用ください。

高知県立文学館ニュース 第72号 平成28年2月11日発行 〒780-0850 高知市丸ノ内1丁目1番20号 電話088-822-0231 FAX088-871-7857

# 高知県立文学館　カレンダー 2月～4月

4月17日まで

## 宮沢賢治 ことばの宇宙展

**平成28年2月11日(木・祝)～4月17日(日)**
**場所：企画展示室　観覧料：500円**

宮沢賢治の故郷、岩手県花巻市は理想郷イーハトーブとして、動物や自然が生き生きと描かれた作品の舞台となっています。

自然との交感の中で生まれた詩や童話のことばの宇宙は、没後80余年たった今も、多くの人々の心を引きつけてやみません。

宮沢賢治のすきとおった物語のことばを美しい写真と共にご紹介します。

羅須地人協会と宮沢賢治像

**展覧会のご案内をしています！ 詳細はこの館報の表紙・2・3ページをご覧ください。**

予告 4月～6月開催！

## 桐野伴秋の世界と文学の旅 ―土佐・日本そして世界へ―

**平成28年4月29日(金・祝)～6月19日(日)**
**場所：企画展示室　観覧料：500円**

本県出身の写真作家・桐野伴秋氏は、高知県に拠点を置きながら県内はもとより、北海道から九州に至る日本列島各地の風景、さらにはヨーロッパやアメリカなど地球規模のスケールで、美の幻風景をテーマに独自の世界観を追求した作品を撮り続けています。

桐野氏が撮影した美しい作品を、ご本人が作品に添えた言葉やその土地を舞台とした文学作品の文章の一節などと重ねながら、臨場感あふれるひとときの「文学の旅」へいざないます。

モン・サン・ミシェル　©KIRINO TOMOAKI

## ご存じでしたか？ 高知県立文学館の多彩な事業！

イベントの日時・内容は変更になる場合がありますので、詳細はお問い合わせください。

最新の情報はホームページにもあるきね～

**◆文学カレッジ・文学専門講座**（毎月**第4土曜日** 午後2時～開催）
各分野の専門講師による連続講座を開催。高知ゆかりの作家や作品について、じっくり学べます。
※参加料：無料　事前に申し込みが必要です。

**◆朗読の会**（毎月**第3土曜日** 午後2時～開催）
企画展に関連した作品や、テーマごとの文学作品を文学館カルチャーサポーターの朗読でお届けします。
※参加料：無料　直接会場(ホール)にお越しください。

**◆語りと紙芝居の会 定例会**（毎月**第2土曜日** 午後1時30分～開催）
土佐民話の第一人者・市原麟一郎さんを中心に、参加者同士が語りや紙芝居の演じ方などを学びます。
※参加料：無料　直接会場(ホール)にお越しください。

**◆おはなしキャラバン**（毎月**第1土曜日** ①午前11時～②午後2時～ 各回とも約30分）
土佐民話の手作り紙芝居を中心に企画展に関連した作品などを紹介します。
※参加料：無料　直接会場(こどものぶんがく室)にお越しください。

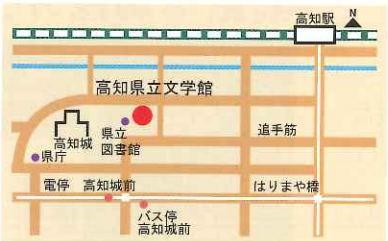
**◆朗読コンクール**（地区審査(県内3会場)**8月中旬～下旬**／県審査**11月中旬**）
県内の小中学生が、一生懸命に練習した朗読を披露します。全国的にもユニークな催しです。

### 利用案内

| | |
|---|---|
| 開館時間 | 午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで） |
| 休館日 | 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。<br>※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。 |
| 観覧料 | 一般360円　企画展はそれぞれ異なります。<br>20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、<br>高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、<br>精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者<br>健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。 |
| 駐車場 | なし。ただし近辺に有料駐車場があります。 |
| 附帯設備 | ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、<br>茶室「慶雲庵」 |
| 貸出施設 | 企画展示室、ホール、茶室 |

E-mail：bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

### 交通のご案内




●高知龍馬空港より空港連絡バス〈県庁前行〉「高知城前」下車、北へ徒歩5分
●JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
●路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分
●バス停「高知城前」下車、北へ徒歩5分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857

フェイスブック好評配信中！
Facebook：https://www.facebook.com/kochi.literary.museum